

れまで漠然と行われてきた、森林劣化や減少の議論にくさびを打ち込むものであり、大変興味深い。著者はこれらの結果を元に政策提言も行っており、傾聴に値する。この成果がラオスの人々に届くことを願っている。

本書によって明らかになった様々な成果がある一方で、評者としてはいくつか気になった点もあるので記しておきたい。まず、本研究によって得られた知見の一般性の問題である。本書はルアンパバーン県の村落を対象とした事例を扱っており、例えば高地は「冷たい土地」であり焼畑に適しているという記述がしばしばみられるが、評者の経験では、こうした評価は村によって異なるように思われる。尾根沿いの土地を「熱い土地」、谷沿いの土地を「冷たい土地」とする村があったり、生育する植物によってそれが決まったりする場合もあり、土地への評価は必ずしも一定ではない。またラオス北部一つをとっても、石灰岩地帯を含む土地利用や、自給用および商品用の作物栽培、家畜飼養、水田との関係性は様々である。シェンクアン県やフアパン県ではルアンパバーン県よりも高標高な土地、異なった環境条件でも焼畑は行われている。家畜飼養の比重もルアンパバーン県のものよりも比較にならないほど高い村落も多い。評者としては、もう少し広い範囲における焼畑を基盤とした生計について、著者のビジョンや評価を教えていただきたいかった。

また評者としては、本書が森林のことを扱いながらも、森林植生や環境の情報がやや少なかつたのも気になる点である。本書は基本的には聞き取り調査情報と地図情報の相互参照を行うことによって議論を展開するが、住民の土地の選択や評価には、聞き取り調査によって得られる情報だけではない、潜在的な経験知のようなものも含まれるはずである。こうしたもののより深い理解には、そこにある環境のより多面的な理解が必要ないように思われる。

最後はやはり、本書によって得られた知見を基にした、焼畑研究の今後の展開がやや見えにくいことを指摘したい。本書では確かに厚みのあるデータによって強固なロジックが構築されている。しかし一方で、そこから導き出された、焼畑村落

の土地利用に関する知見や焼畑を内包した社会がどのようなべきかに対する今後のビジョンが個別的なものにとどまっている感があるように思う。焼畑は人類史の中でも歴史の古い農業で、世界中で行われてきた農業である。研究にしても膨大な蓄積がある。評者としては、著者の考える焼畑研究のより大きな地理的、時間的スケールで考えた場合のビジョンがどのようなものであるのか、知りたかった。これについては本書の中でも時々触れられていたもので、今後の展開に期待したい。とはいえ、本書は今後の研究を進めていくうえでの着実な足場を提供している良書であることは間違いない。ラオスで行っている評者としても、ラオス研究者の後輩として着実な成果を拝見し、身の引きしまる思いである。貴重な成果を出版していただき大変ありがとうございました。

(広田 勲・岐阜大学応用生物科学部)

師田史子、『日々賭けをする人々——フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』慶應義塾大学出版会、2025、vii+354+20p.

本書は著者が2022年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文に基づく著書である。実証に裏付けられた手堅さと現場に密着した生き生きとした描写によって、優れた研究成果でありつつ、読みやすく飽きさせない書物となっている。

序章「彩色の精神」において著者はまず、賭博の賭けや遊びに「定型的で無味乾燥な毎日を鮮やかに彩る」「近代合理的な価値から自己を解放する」「彩色の精神」を抽出したいという(p.7)。著者は特定の社会における賭博の捉え方、実践のされ方に着目する。また賭博を社会的機能として捉えるのではなく、賭博者の体験に注目し、劇的な勝負よりも賭け続ける日常を描くことを中心に据える。

本論は、賭博実践の社会背景を描く第Ⅰ部、フィリピンを代表する伝統的な賭博である闘鶏の実践と賭博者の言説を描く第Ⅱ部、フィリピンにおいて日々広範に行われている数字くじの生活におけ

る実態と没頭する人々の言説世界を描く第Ⅲ部で構成されている。

第Ⅰ部「賭博が根差す場、その基層」は4つの章から成る。第1章「賭博との出会い、フィールドワークの輪郭」は、フィリピン国家の最周縁に位置する地域社会としてのミンダナオの4つの調査地と調査対象となる家族たちを紹介する。また依拠する現地調査のデータの性質を示し、特に著者自身人々と共に賭博の実践を行いつつ暮らしの中で調査を進めた点を示す。

第2章「フィリピン賭博の歴史」は、植民地期以前から行われていた賭博が、16世紀のスペインによる植民地支配以降、度重なる国家の介入を受けつつ生き延びてきた様を描く。賭博は常に規制管理の対象であったが、大衆の支持は揺るがず、その緊張関係の中で闘鶏は国家に包摂され、数字くじは非合法のまま国家を翻弄しつつ繁栄し、やがてドゥテルテ政権によって合法化に向かった。

第3章「規律訓練されない賭博者たち」は、道徳規律をフィリピンに確立するとの名分で政府が既存の数字くじを合法賭博に包摂したことに対し、人々が暮らしの中でどう語り行動したかを描く。合法賭博に従う人が多い中政府の規制から外れた違法賭博を運営する者もあり、社会規範を無視した政府の取り締まりに対し義憤を表にする姿も見られ、人々の暮らしの中での賭博についての意識や規範は実質的に変わらなかったという。

第4章「善悪と神」では、人々の賭博をめぐる道徳観念、社会規範、宗教的世界観がいかに醸成されていくのかを分析している。賭博への過度な没入を危険と考え、「遊び」として「ほどほど」にすることが良しとされている。また賭博の勝ちはずは幸運なあぶく銭であり、勝ち金の分配を惜しまずすべきと考えられている。最後に賭博における神がどう捉えられているかが考察される。賭博の勝利という幸運を神や宗教的世界観と関わらせる考えはあるが、むしろ賭博者は、偶然の連なりの中に見られる超自然といえる何かの発露として幸運を捉え、それを繰り返し希求している。

第Ⅱ部「闘鶏——人間と鶏が織りなす伝統的熱狂の円環とリズム」は2つの章から成る。第5章「闘鶏のエコノミー——鶏と関係を結び、鶏に生活

を賭ける人々」は高度に近代資本主義的な闘鶏の経済構造のもと、愛着と距離間の二律背反の中で鶏を繰り返し育て闘わせ続ける闘鶏家たちの姿を描き出す。闘鶏は公認の全国的なスポーツ兼賭博であり、鶏の育成を含むすそ野の広い一大産業である。闘鶏産業の管理方法、会場、試合の組まれ方と実施の流れ、二種類の賭け、試合の進め方と経過、決着と鶏や掛け金の処理、また闘鶏のための鶏の品種、3人の闘鶏の鶏の育成者の姿、そして闘鶏の鶏の育成、健康管理とトレーニング、試合の中で鶏が置かれる状況と闘鶏家が見守る距離感、そして最後に死んだ鶏が勝者の食用とされる結末までの流れが詳細に描かれる。

第6章「充滿する『負けの理由』——鶏に賭ける技法と不運の制御」は、知識と技術を駆使しつつ繰り返し運を引き寄せそうとすることで、賭けに勝ち利益を得ようとする賭博者たちの姿を描いている。鶏のケアについての実際の知識や月の満ち欠けと鳥の色の賭け合わせで占う民族知的な理解を交えつつ賭ける鶏を決める。連続する試合に人々は賭け続け、勝敗をめぐる賭けの反復のリズムが生み出される。人々が勝因や敗因について語り合う中、連敗における敗因めぐり不運についての議論が特に前景化する。それは、勝つか負けるかの二者択一なら負けの次は勝ちそうなのに連敗が続く不可解さや、どんなに知識を尽くしたところで実際の鶏の闘いの勝敗は生き物ならではの予測不可能性に翻弄されることによる。賭博者たちは、運の時間的、空間的な流れをつかもうと工夫を凝らす。

第Ⅲ部「数字くじ——無根拠性の内に増殖する自己と世界の接続」も2つの章から成る。第7章「つまらない賭博への没頭——数字で世界を埋め尽くす」は、ランダムな数字にただ賭けるだけの「つまらない賭博」である数字くじに、なぜ多くの人々が熱中するのかを問い、賭博が日常を侵食し、日常が賭けと連続するかのようになんか魅了する、と捉える。「ラストトゥー」くじは単価が安く、抽選は毎日3回、主に二けたの数字を当てれば80倍の配当がある。売人は積極的に人々を訪問し、常連客の生活リズムにくじが習慣化される。勝率が半々の闘鶏で不運が前景化するのと対照的に、確

率がより低いラストトゥーでは当たった幸運が前景化しやすく、しかも当選情報が広まり、当選祝いが仲間たちと共有されることで身近に認識される。生活の中で人々は自分に関わる数字を意識し積極的に探すことで、生活の様々な局面の意味が再確認され、それが賭ける数字と運命的に関連している可能性を想起させる。ありとあらゆるものが数字によって自己と結びつけられ、そこから幸運を探索するゲームが、他者と議論や情報を広く共有しながら実践される面白さがある。本来無根拠な数字くじの結果を恣意的に自己と接続することで、偶然と戯れる遊戯を生み、そこでの当選は社会性や必然性と切り離された「純粋な幸運」となる。こうして単純で浅い遊びや賭けであっても、賭けを楽しもうとする賭博者の能動的な態度によって深い意味世界が創造される。

第8章「確率的思考の流転と現実性への接近——異なるレイヤーを往還する」は、数字くじに参加し続ける人々の、賭け実践の中での確率的思考の変容を捉えようとする。ラストトゥーの賭博者は、数字との出会いを予兆として捉えつつ100分の1の中で判断し、賭けた数字が「出るか」「出ないか」の二者択一つまり2分の1で待ち、結果が判明すれば絶対的な現実としての1に至る。その過程が反復され、自分とその世界、また他者の数字の世界と出会い続ける。

終章「意味に満ち満ちた世界」は、以上の論点を、賭博者の世界、賭博者の生、という点から論じ、まとめている。

いくつかの点について論評したい。まず第4章における「賭博における神」について、キリスト教研究を専門とする評者の観点からコメントする。キリスト教は聖書や伝統における物語を提供し、信徒は自身の人生をこれと重ね合わせることで、神の存在と導きを実感して生きる。それは、細田[2019]が指摘したような「人生を賭する物語」において神からの幸いを見出すという姿との親和性が高い。他方でそこには賭博者の人生と重ね合わせる物語は見られない。著者が明らかにしている通り、賭博者にとってキリスト教とは異なり、神なき純粋な偶然が繰り返される世界を前提とし

ているからだろう。そうであれば、日々賭博者のな生を生きる人々の多くがキリスト教徒であることを、どう捉えたらいいのか。この問いはすでに、人々が教会に所属しつつ、教会が認可・黙認するところを侵犯しながら生きている現実を描くリンチの「フォーク・カトリシズム論」[Lynch 2004]や、人々がキリスト教徒である自身とその規範と無縁な実践を切り分けて二重生活を生きているとするプラタオの「二段重ねのキリスト教」[Bulatao 1965]以来現在にまで続く、フィリピンを宗教文化理解に関する基本的な論点である。本書はここに新たな光を当てていると言える。

他方、評者にとって引掛かりを覚えたのは数字くじをめぐる賭博者の描き方である。特に8章では数字くじの考察が、勝ちを目指す個人の思考の展開をめぐる哲学的な考察で占められている。著者の中心的な関心が「賭博者のな生」を描き出すことに向けられているからであろう。しかしほかの点ももっと掘り下げるべきと評者には思われる。

本書の記述によれば、数字くじは全国規模で日に3回実施されており、これを運営組織のヒエラルキーが、巨額の資金によって運営している。この組織に支えられ、末端においても売り子が、これまた全国展開している闘鶏場も絡めつつ、精力的なセールスを行っている。賭博者の環境は、この巨大な制度、産業によってお膳立てされている。総じて賭博者が損をし業界が巨万の富を蓄積するこの仕組みに、数字くじに熱中する人々はハマられており、日々数字が頭から離れない中毒の中にある。生活の破綻を避けようとする規範については第4章に記されてはいるが、もっと構造的な問題がある。賭博者の生が持つ「幸福」は、没頭する楽しみの詳細を描き出すだけではなく、この中毒的な側面や搾取的な側面と合わせて考察する必要があるのではないかな。

また、この賭けのゲームは、生活世界の中で賭博者ひとりひとりが、繰り返し数字を探し賭けに打って出ることとしていて、ひとりひとりの幸運の探求として描き出している。しかしこのゲームは、濃密な社会関係とそこで共有されるゲームのルール、また繰り返される議論とそこでお互いに数字を想起しあう場、また勝てば賞金を分かち

合ったりもする関係性を不可欠の舞台としている。確かに各自は最終的に自分の判断で自分のお金を賭けるだろう。しかしこの賭博は、個人の生活のみならず、社会関係が数字で埋め尽くされるような環境でこそ、より重厚な数字世界を生み出し、反復されるより長期の継続的ゲームとして捉えられる。だから、賭博者は単独のプレーヤーでもありつつ、そこには多くの知り合い、地域の人々、そしてその背後には多くの匿名のフィリピン人たちが同じゲームに参加しており、それが国民的な賭博空間となっていることにこそ、このゲームの特徴があるのではないか。

とはいえ本書には、著者自身の賭博者の生への熱い思い、フィールドの具体的な描写や人々の語りの臨場感があふれ、同時に人々の語りと実践を人類学的に掘り下げた考察も迫力がある。フィリピンにおける賭博の歴史や制度、産業の構造などについてのまとまった叙述も明快で、フィリピンの賭博の実態について幅広く明らかにした新規性の強い成果と高く評価したい。フィリピンにおける幸運をめぐる議論の射程は広く、その中で、本書はかなめの一つである賭博の実践についての研究を切り開いた魅力的な成果であり、今後も広く参照されるであろうと考える。

(宮脇聡史・大阪大学大学院人文学研究科)

引用文献

- 細田尚美. 2019. 『幸運を探すフィリピンの移民たち——冒険・犠牲・祝福の民族誌』東京：明石書店.
- Bulatao, Jaime. 1965. Split-Level Christianity. *Philippine Sociological Review* 13(2): 119–121.
- Lynch, Frank. 2004. Folk Catholicism in the Philippines. *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch*, pp. 207–218. Quezon City: Ateneo de Manila University.

小泉佑介. 『熱帯フロンティアへの移住と開拓——インドネシア外島の農園開発に伴う地域変動』東京大学出版会, 2023, viii+247p.

1980年代以降、インドネシア・スマトラ島のそれまで人口過疎地であった周縁部ではアブラヤシ農園が爆発的に拡大し、並行してアブラヤシ栽培に従事する人びとの移住が行われた。ある者は企業の経営するアブラヤシ農園に雇用され、またある者は個人農園の所有者を目指し、新たな土地へと移住した。本書はインドネシア外島のこうした周縁部を「熱帯フロンティア」と位置づける。そのうえで、スマトラ島東岸部のリアウ州に暮らすアブラヤシ産業に携わる国内移住者を研究対象としながら、いかにして熱帯フロンティアが人びとを惹き付けてきたのかを多角的に分析している。

序章では書籍全体の議論の枠組みが提示される。著者はまず「熱帯フロンティア」という用語を、1980年代から90年代にかけて京都大学東南アジア研究センターを中心に展開されたフロンティア論に依拠して定義し、自然地理的および社会的側面の双方からその特徴を明らかにする。ここで「熱帯フロンティア」は集約的な水稻耕作を基盤とする「農村」と対置され、そこでは土地に縛られない自由な社会的雰囲気や移住・開拓が一種の「賭け」として行われている様相が強調される。続いて、インドネシアにおけるアブラヤシ産業の特徴が解説され、企業経営の大規模農園と個人経営の小規模農園の相違が整理される。さらに、本書を貫く分析枠組みとして、ポリティカル・エコロジー論（PE論）が導入され、マクロ、メゾ、ミクロといった複数のスケールを統合的に扱う分析の重要性が示される。

第一章はスマトラ島を中心にインドネシア外島で農園開発がいかに拡大したのかを歴史文献と作物統計データを用いてマクロ・スケールから検討する。スマトラ島の農園開発はオランダ植民地期である19世紀後半のタバコ農園に端を発し、20世紀前半のゴム栽培の隆興を経て、独立後の1980年代以降にはアブラヤシ農園が急拡大した。この急拡大の大きな原動力になったのは、土地なし労働者や貧困農民へ土地分配し国営企業の指導管理の